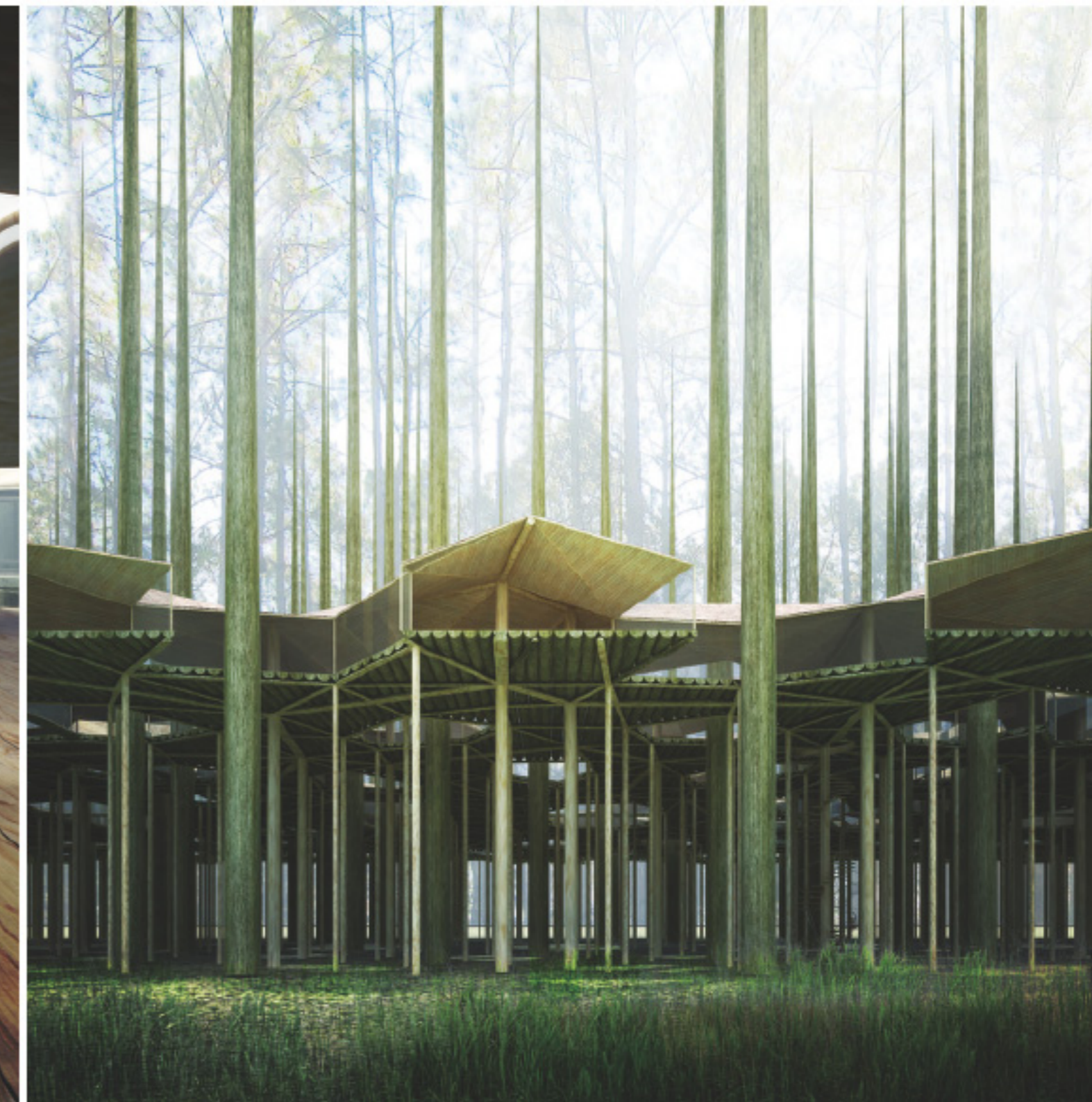


木を全て切り倒して間伐するのではなく、木を殺す事で森を守る。木材を移動する事なくその場で地消する建築。最小限の空間構成からどこまでも広がりつづけることのできる、人の時間スケールを超えた、死んだ木によるツリーハウス。

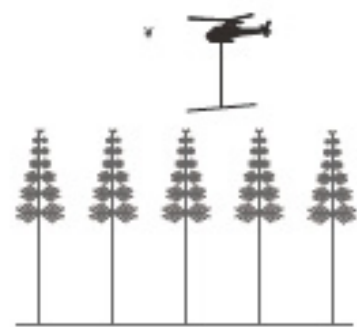
DEAD TREE HOUSE



01.

／プロローグ

日本の森林を守っていくためには、森に手を入れていく事が必要不可欠である。2000年に入り、森林整備を支援する一環として間伐材の消費拡大に向けた動きが本格化するものの、未だに開放しにされた森林が多く存在しているのは承知のとおりだ。そもそも間伐材とは森林の成長過程で密集化する木を間引く過程で発生する木材である。間伐をおこなわなければ、森の保水力も低下し、大きな災害につながる恐れもある。



／木材の移動

通常、木材は山からおろす為の山道が整備された場合を合を離れて、ヘリコプター輸送がほとんどである。間伐材の場合も同じく、輸送にヘリを借り事になり、コストも同じようにかかる事となる。



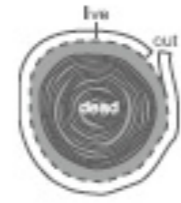
／間伐材と破材のコスト

間伐材は輸送のコストがかかる蓄に木材としての価値が低く、仮設の棚やチップは、木材の破材によってつくられており、実際には間伐材は切られた後そのまま山に放置されるのが現状である。

02.

／図案、間伐と木の殺し方

そこで、間伐の過程で主要な建築の柱となる部分を材として残しながら、木を“殺して”いく事で、間伐しながらして建築をつくる。木は中身の大半がすでに死んでいる。生命体として活動しているのはほとんどは樹皮の付近の細胞のみである。この部分を切り取ってしまえば事実上この木は“死んだ”ことになる。(針葉樹の場合)



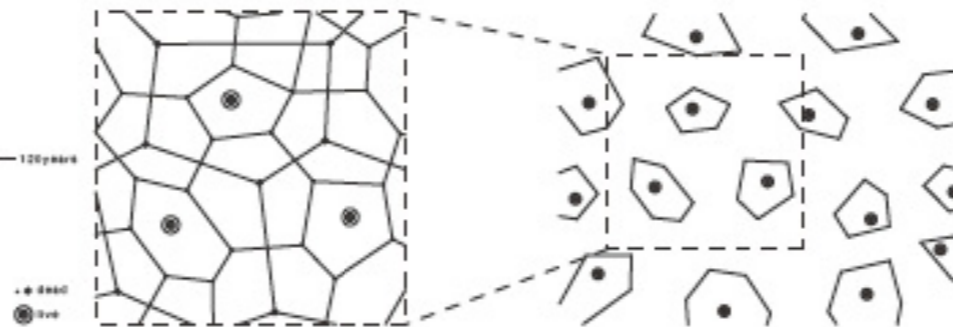
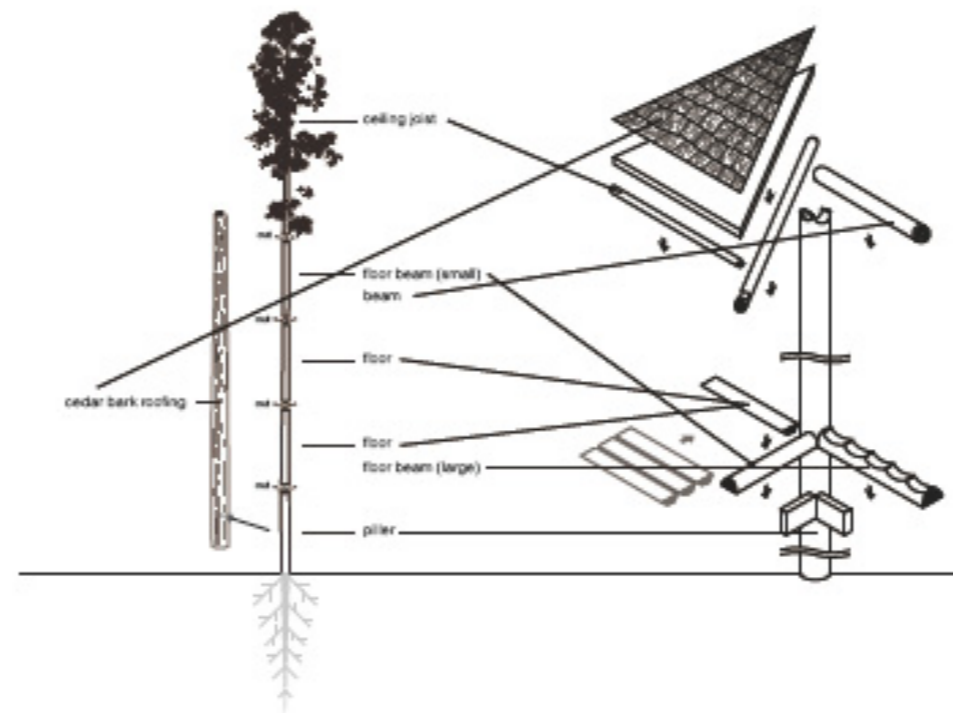
／間伐

林業が盛んな地域では植樹の際に1haあたり8,000~10,000本あたりの樹木を植える。(杉や松の場合)間伐の際にある程度大きくなった木は柱材として残しながら間伐していく。(上図の黒い・が柱として残しながら殺した木材)

木材を切り出すとき1等玉(右図参照)までの部分を柱として残し、そこから上部の木材についても極力丸太の状態を保たせながら建築材料として用いる。木材を移動させる事なくその場で利用する事がエネルギーのロスを少なくし、理想的な地産地消の建築材料としての使い道である。

／ボロノイ

さらに成長の過程によって間伐する木を決め、柱材として残す木を算定する。その段階で自然と間伐しない樹木と間伐する木の距離が最も離れた場所となり、ボロノイ図のような形で平面に表れてくる。



／二重ボロノイと平面計画

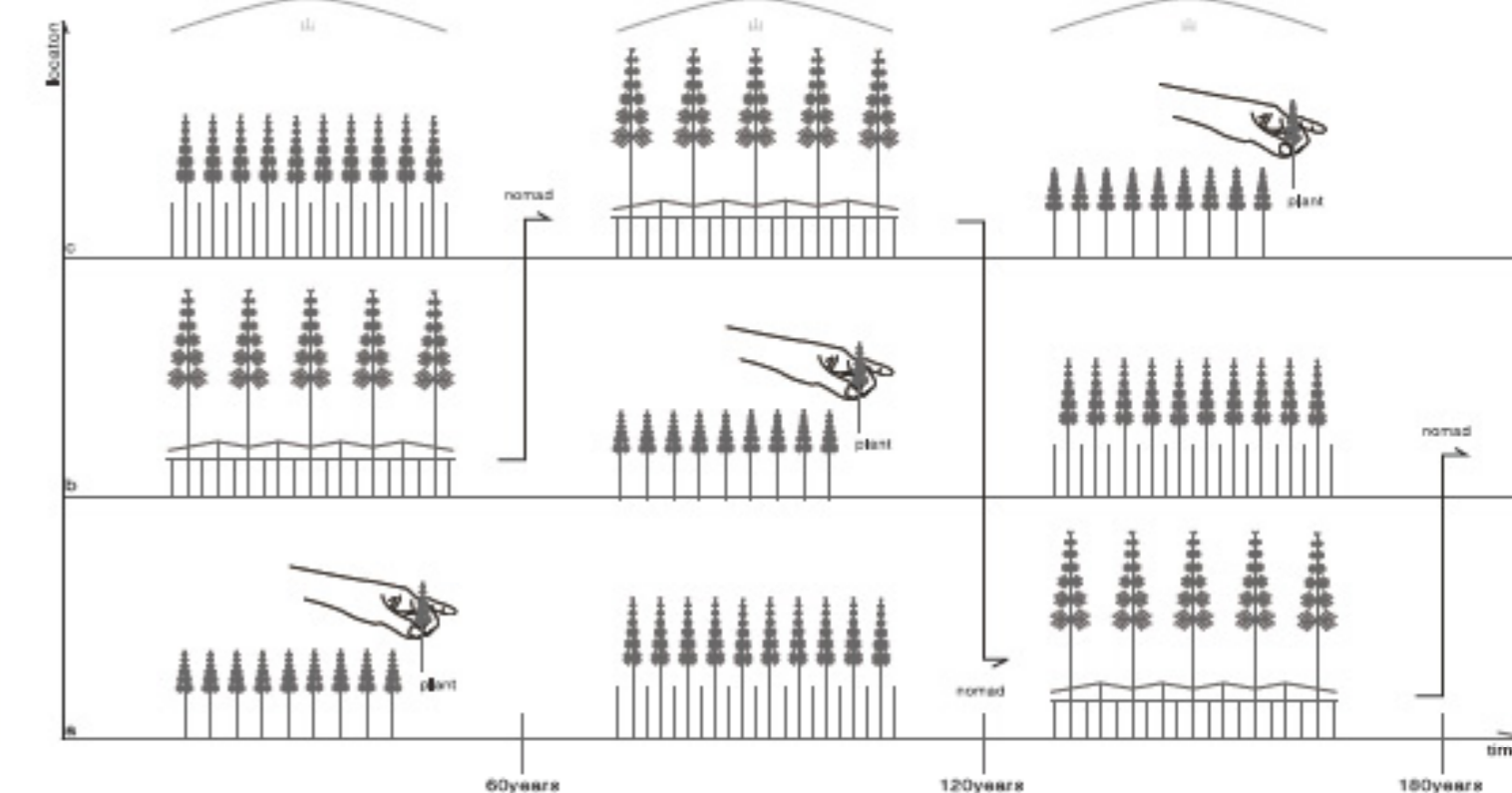
間伐によって残った柱材は樹木から最も強い場所に位置しており、その点を結ぶと二重ボロノイになる。上部の太いラインをメインの梁材として構造を構築させ、細いラインを補強及び平面のアウトラインとしている。

03.

／なりわいとひと一人の時間をこえて

森を育てていく守っていくにはひと一人のライフサイクルをこえてきたスパンそしてスケールで、多数の人が世代が集まりながら森林というものを考えていかねばならない。

下図は垂直方向にロケーション、水平方向に時間軸を記したものである。ここに住まう人(森を守る人)たちは森林との共生によって、人の時間をこえた超長期的なノマド環境をつくりだす。



／human / life / community

